

## 生命的世界のさまざまな姿

花 崎 皋 平  
(哲学者)

### アイヌ民族の生命観にふれる

最初に、私自身が生命の問題、「いのち」の問題を考えるようになった背景をお話したい。

私は1964年から北海道に住んでおり、1970年以降、北海道の地域破壊につながる大規模開発と闘う住民の人たちに出会い、ささやかながら支援をしてきた。その過程でアイヌ民族と出会った。アイヌ民族の生命観、「いのち」についての考え方に触れたことで、それまでの自分のあり方を大きく変えることとなった。

アイヌの考え方は、近代科学主義の立場からは「アニミズム」と呼ばれ、遅れた考え方とみなされてきた。アニミズムは、森にも木にも山にも川にもすべてのものに「いのち」があり、その「いのち」はみな対等・平等で、人間のほうが高級な「いのち」ではないという考え方に基づいている。しかし、自然科学的に考えれば、無機物にも有機的でないものにも生命があったり、霊（スピリット）があるという考え方を持つことは迷信であり、迷信を信ずるのは、無知蒙昧だから、啓蒙して自然科学的な知識を教えなければいけないとされた。そのためアイヌの人びとは自分たちの考え方を恥ずかしく思う態度を教え込まれ、押しつけられた。

北海道では、アイヌは、「和人」すなわち多数者である日本人の前で、アイヌの文化や考え方を表明することを避ける習性を身につけさせられ、自分たちの風習や文化を表明してしまうと、アイヌとして差別されると気に病む。アイヌの「いのち」

ち」はそのような関係の中にあつた。

1980年代半ばから世界各地の先住民族のコミュニケーションが盛んになった。国連にも人権委員会の下部組織として先住民作業部会が作られた<sup>(1)</sup>。その議論の過程で、先住民たちは西洋の近代科学からアニミズムと呼ばれて軽蔑されてきた考え方が先祖からずっと引き継がれていることをお互いに発見するプロセスがあつた。その関係を逆転させて、ヨーロッパ中心の近代科学の考え方でいいのかという問い直しが始まった。その思潮に触れたことが「生命観」を問い直す第一のきっかけだつた。

二番目は、水俣病の被害民の方々に教えられる経験である。水俣病の患者さんたち、それを支援する人たちからお話を聞く中で、水俣の作家であり、語り部である石牟礼道子さんのお仕事に出会い、大きく揺すぶられ、今でも非常に影響を受けている。

### ハンセン病の療養者との出会い

また、ごく最近になって、これまで無関心であつたことを恥ずかしく思いながら、ハンセン病の療養者の方々に出会い始めた。群馬県草津にある栗生楽泉園をはじめとし、数ヶ所の診療所を訪れた。最近には鹿児島県の鹿屋にある星塚敬愛園を訪れた。療養所に行つて気がつくことは、子供が一人もいない、子供の声が聞こえない。これはハンセン病の方たちが子供をつくることを国が許さなかつた、

妊娠すると強制墮胎をしてきたという歴史のもとにあったからである。生きながら存在そのものを全部徹底的に国が管理し、国の方針を逸脱することを許さなかった歴史である。子供がいないということは、「いのち」の本来の流れが断ち切られているということである。そういう意味での「いのち」の流れは断ち切られているが、これは口で説明することは困難であるが、そこで暮らした、そこで人生を終えた方々の苦しみ、悲しみ、そこで亡くなった方々の思いをたたえ「気」が流れているのをひしひしと感じる。

6年前、ハンセン病に対する国の政策は誤りであり、憲法違反、人権侵害であるという判決が熊本地裁で出された。それ以後、多くの市民が初めてハンセン病についていろいろな情報を得られるようになった。それまでは、私たちの多くは無自覚で情報を得ようとしてこなかった。

鹿児島鹿屋でおばあさんたちにお話を伺うと、裁判の原告になったことで周囲から非常に非難されたということだった。国のお世話になっているのに何で国に盾突くことをするんだと。判決後、一般社会とのつながりは徐々に回復してきている。

草津の栗生楽泉園には、詩人の桜井哲夫さんという方がいる。60年以上もずっとそこで暮らし、80歳過ぎている。その方と若い学生キムの金正美さんという在日韓国人3世の方が出会い、金さんに付き添われて故郷の津軽に里帰りをされた。それがNHKの「にんげんドキュメント」で放送されて非常な感動を呼んだ。私もそれを観て泣けてしようがなかった。桜井さんも子どもを強制墮胎され、生きて産まれた子を殺された。長年の孤立の後に若い金正美さんに出会った。そこでおじいさんと孫という契約を結ぶ。血縁ではないが「いのち」のつながりが生まれ、ふるさとへ帰ってふるさとの親族と初めて出会う。これは迎え入れてくれた親族の方たちの非常な勇気と決断の結果だった。それまでは全く存在しない人、地域に

居てはならない人、いないことにされた人であった。親族の中にも桜井さんがいるということすら知らなかった人がいた。生きて存在しているのにそれが否定され隠されていた。桜井さんは津軽の風土と再び出会い、再び風土の「いのち」を受け取った。親族と会い、友達と会い、友達が今、町長になっていて、その人が手を握って津軽の言葉で「私たちはケヤグではないか」と。ケヤグというのは、「契約」が縮められた言葉だそうで、昔一緒に遊んだ仲よし友達という津軽語だが、そういう言葉が町長から出る関係の回復を目の当たりにして、やはり「いのち」というのは流れの中になければならない、もともと流れであるという思いを私は強く感じた。

#### 水俣から人間を考える

石牟礼道子さんの言葉を引用したい。

「日本列島の小さな入り江に住んでいた人たちというのは、何か天地万物、私たちの目に見えている世界も見えていない世界も全部「いのち」を持っていて、我が心は石にあらずという言葉もありますが、石にも木にも心があって、「いのち」のないものはないと思っていたのではないのでしょうか。そういう「いのち」のある者同士で生きていた。そのような世界は全部大きな一体となって親和していた世界ではなかったのでしょうか。私どもが現世と見ている世界は、そんなふうにはコケ一本でも、石ころ一つでも、岩でも木でもアシでも、風にさえも「いのち」や性格があって、雪にも雨にも全部そういう「いのち」があって、それを私どもの地方では「いのち」と言わないんですけども、神様と言うのです。通常、普通に我々の周りにはそういう神様が自在なところに人格を持っていて、今でいえば物質の中に入れられるでしょうけど、物質というのはなかったんですね。全部「いのち」を持っていて神様だった。まだそのような生活感覚は辛うじて生きているのです。」

これに類する言葉は石牟礼さんの中に幾つも幾つもとたくさん出てくる。水俣病の聞き書きの『苦海浄土』という名著の中に出てくる漁師の人たちの姿というのは皆、このような生命観を持って暮らしてこられた方たちである。石牟礼さんは水俣から世界全体、もっと普遍的なあり方や文明について考えていく。これは地域に生きる生き方として、私が学びたい生き方である。地域だから部分だ、地域だから一部だと考えることはできない。底のほうに戻っていくと、広い世界につながっていると書いていい。

「水俣から文明を考える、水俣から宗教を考える、水俣から人類が生き直すためのモラルを考える直さなければ、水俣から人間愛とは何か、哲学とは何か、科学とは何か、そういうのが渾然となった警告を人類の未来に対して発しなければならないと考えております」ということを書かれている。これはハンセン病の療養所から考えることもできる。

### いのちの意味

「山に成るものは山のあのひとたちのもんじゃけんもらいにいたても、欲々とこさぎ取ってしもうてはならん。カラス女の、兎女の、狐女のちゅうひとたちのもんじゃけん、ひかえてもろうて来(け)」。来(け)というのは来なさいということ。そういう水俣のお年寄りの言葉を紹介しているが、これは全くアイヌの人たちの考え方と共通である。

アイヌは口承文化で、アイヌ語でウウエベケレ、日本語でいうと昔話が道徳や文化を伝えてきた。先日亡くなられた萱野茂さんというアイヌ語の一番の使い手だった方が、日本語で読める本に書き残しておられる。その中に『キツネのチャランケ』という話がある。チャランケはアイヌ語で、チャは口、ランケは下ろすという意味で、チャランケで言葉をおろす、文句を言う、あるいは論争する、訴えるという意味である。

石牟礼さんの話と同じで、アイヌの人たちは秋に川へ上ってくるサケをとり、それを主食にして食べていたが、ある晩、村の長老がキツネが叫んでいるのを聞いた。そのキツネの声をよく聞いてみると、川に上ってくるサケは人間だけが食べるものとして神様が贈ってくれたのではなくて、クマも食べる、キツネも食べる、カラスも食べる、そういうみんなが分け合って食べるものとして贈ってくれたのだ。それをこのごろ悪いアイヌがいて、人間ばかりがとって、キツネが川に入るとろうとすると私たちに追い払う。人間たちにそんなことしないでくれと訴えている。それを聞いてその長老は、それはもっともだ、そのとおりだと言って、欲の深い、キツネをいじめたアイヌを戒めた。最後が、「だからこれからのアイヌたちよ、サケが上がってきたら、クマの分、キツネの分、カラスの分を残しておいてやりなさい」というお話である。それは萱野さんたちも実際にやっていた。特にキツネは人間に姿を見られるのを嫌がるので、キツネの分は川からとったら葦の間に置いてやっただよとお話しされていた。

アイヌの人との関係で自覚したことだが、わかろうとすることは自分の言葉に翻訳することなのである。自分の解釈システムに取り込めたとき、わかったとなるわけで、自分の理解の網の目にすぼっとおさめたからわかったと言うが、差別と絡んだ関係などにあるときは、支配してしまうこと、勝手に相手を理解したと誤ってしまい、自分の枠に入れてしまうことだと気がついた。十分には理解できなくても親しい関係を続けられるということがないと共生はできないと思う。特に日本人の私たちの場合は他文化の人に接することが少ないので、わからないままに親しく友達であろうとする努力をよほどしないとだめかもしれないと考えようになった。アイヌの人たちとつき合いをしていると、つき合いの初めは、アイヌの人たちは和人とかシャモと言うが、あんたシャモだよ、和

人ではないかとかと言って、警戒が先に立つ。そして、本当に友達になりそうなやつかどうかを試す。それは意図的に試すというより、差別で傷つけないための自己防衛からである。ちょっと突っついてみる、ちょっと意地悪なことを言ってみたりする。私はラブコールだと受けとめなければいけないと思っている。

胸の扉をたたいて本音はどうなんだい、本当におれとつき合えるか、自分がつき合っても大丈夫なやつかというのをたしかめてみるというプロセスがあるように思う。

もう一つ石牟礼さんの話。「水俣病にかかわってからは人々の生き方や死に方を数多く見てきた。自分の死に方を考え続けていて、意識の世界よりは無意識界のほうを見るようになってもきた。一人の人間の言葉にならない存在の全量について考えると、気の遠くなるような思いがする。生き残りたちを見ていて、一人の生命の歴史は人類史の総括をつつましく背負って実は終わるのだという気がする」というのがある。つまり生命というのは個体に区切られてあると考えない。しかも、意識ある世界にだけ区切られてあるとも考えないほうがよい。もっと全体の世界なのだという考えである。

「そのような日常があった頃は、人ひとりの死というのは……残された総ての世界のために一つのどんな小さな死でもそれはひきつがれて生きかえる、あとに残された者の魂となって生きかえるために、一つの死があるという日常だったのですね。」「一人の人間が死にますときに、伝えられなかった念というのがずうっと昔からあると思うんですね。断念してきた念いが。一番深い念いを断念してひとりの胸に呑み下してきて、伝えられなかったという念いを私たちは代々受け継いでいると思うんですね。断念の深さを、断念の深淵を、一日にどのぐらいの念いが私たちの胸に浮き沈み

していることでしょうか。日々、底に沈んでいく念いがあります。口に出せるのは泡の一粒でございます。人はみな、そういう念いを抱いて死んでいくのではないのでしょうか。

私たちはなぜ未来を夢見るのか。そんなふうによく深く沈められているものたちが未来を夢見たがるのではないのでしょうか」。

ハンセン病の人たちと出会って、この考えに共感して思う。この人たちは生きてはいけないう存在、むしろ早く絶滅させたい存在として、らい予防法ができてから90年間ずっと療養所の中に入れられてきて、家族の縁も絶たれて、社会で生きなかった、自分の能力を発揮したかった、恋もしたかったというさまざまな思いを断念しながら、生きてきた人たちだった。それでは、そういう人たちはむなしく死んでいったひとたちでしかないのか、そういう人たちのいのちは何の意味もないのか、そういう問いを問い直すことがとても大事ではないかと思う。

石牟礼さんはまた宗教に関連して次のようなことを語っている。

「不思議でならないのは、なぜキリストは物語に生まれたとき……最初から権威を賦与されたのかと思うんです……最初から救い主で偉い人だと権威を与えられると思うのです。キリストは本当は無名の人だったと思うんです。権威づけられない聖者はどうしてあり得ないか。そうでない聖者は無数にいたと思うし、いまもいると思うんです。それはやはり最下層の、汚辱にまみれて、一切の受難を背負った人間であったらうにと、あり続けたらうにと思うんです。権威づけられず、なんの恩恵にも浴さない、いつも無名で生き続けてきた最下層の人間たち、それでもなお世の中にある力を持ち続けて、評価されることのない、そういう力こそが、人類をほんとうは生き変わらせてきた力だと思います。そういう力は、一言で言うと愛なのでしょう、愛と言ってしまうと、これもヨ-

ロッパ文明流になりますが、仏教用語で言うところの“慈悲”となります。慈悲というのは仏が衆生に垂れるのではなくて、逆だと思ふんですよ……救われぬ人たちが満ち満ちているからこそ、宗教が救われている、辛うじて命脈を保っているわけです」。

力がある人が救い主ではなくて、受難の中にいる人たちが慈悲を私たちにもたらししてくれる存在なんだという逆転した関係である。

成田の東京国際空港ができるときに激しく反対した三里塚の農民たちがいる。そのとき青年行動隊だった人たちが今はもう50代、60代になっている。少数だが残っている人々は徹底して有機農業をやっている。それは、自分たちは「いのち」をはぐくむ食べ物を供給することによって、自分たちの存在理由、ここになお頑張っていることの理由を身をもって証しするという態度なのである。彼らが発した言葉の中に、「<sup>じそん</sup>児孫のために自由を律す」というのがある。子どもと孫のために自由を律する。今の自分たちがあらゆる欲望の充足を果たすのならば地球に未来はないことは、周知のことである。地球の持続のためには欲望を抑制しなければならない、自分の自由な意思でそれを抑えなければならないという言葉が発している。そして、地球的規模の実験村という企てを行っている。

### アンデスの農民世界からのメッセージ

南アメリカのアンデスの農民世界からのメッセージもある。2005年7月に、オルタナティブな社会を議論するワークショップに参加するために中国を訪れた。今、中国は農村農民問題が深刻な状況にあり、都市化、文明化、近代化の陰で農村が犠牲になっている。その中で農村をもう一遍再建しようという試みが出てきている。2004年に、さっぽろ自由学校<sup>(2)</sup>で、東アジアの民衆教育に関するシンポジウムを開いた。そのときに招いた農村・

農業の再建運動をしている農業経済学教授が主催する実験農業学院に行くはずだったが、ちょうどその時期に、その農村付近に発電所をつくるという計画に農民が反対して、農民と電力会社が雇った暴力団との間に衝突があり農民が殺され、そのために現場には行かれなくなってしまった。そのワークショップにはフィリピン、タイ、遠くは南米のペルーから人が来て、もう一つの世界についての討論会があった。ペルーから来たホルヘ・イシザワさんという日系3世の農業技術者で農村活動家の報告を聞き、そのグループの活動を記した『再生の精神』(The Spirit of Regeneration)という本を読んだ。今、世界的な規模で生命観の共有が進みつつあるという感想を持った。

アンデスは、ペルーからチリにまたがり、主としてペルー国である。たくさんの先住民がいて、アイマラ語やケチュア語などたくさんの言語があり、インカ帝国の遺跡がある。1万年前からの世界の農業の発生地の一つである。ここの農業は高地農業で、農民が昔ながらの農業をしている。主としてジャガイモやトウモロコシをつくり、ジャガイモだけで3,500種類あるという生物多様性が保存されている。アンデス農民世界のキーワードは、知恵は Wisdom、love、養育 nurturance、それから互恵 mutual assistance、会話 conversation、共生 co-existence、それからダンス dance が入る。

アンデス農民の世界は、アンデス世界をあるがままに受け入れ、世界を愛し、愛される関係に安らいでいるという。基本的な世界と人間との関係は、人間が育てるだけではなくて世界に育てられる。それは抱き合ったり愛撫したりする直接性の世界で、その中では主体と客体の区別は存在せず、目的と手段の乖離もなく、そうした抽象は何もない。西欧の技術は知識を前提にしている。知識は主体が対象から距離をとり、対立し、対象のあるがままの姿を分解して情報化する。これは近代科学のとってきた基本の姿勢である。アンデス世界

は、知識ではなく知恵によって世界と関係する。知識は知ることを通じて相手に働きかけて、相手を変える、変化させることを目指すけれども、知恵は行為することから生まれ、知恵はお互いに調子を合わせる—(チューニングする)、同調しながらお互いが理解し、お互いが変わるなら変わっていく。それが感じ取って愛することにつながるのだと。こういう考えは、アイヌの文化同様、支配的な現代文化の立場からは、否定されたり軽べつされたりしてきた。そんなことをしているから停滞するんだ、そんなことをしているから発展しないんだ、そういう考え方を変えなければだめなんだ。農業の発展は農業の生産性を高めることで、農業技術を西欧から学んでやらなくてはだめだ、と。ペルーも例外ではなかった。そのような流れに対して、1960年代末から「1968年革命」と呼ばれる世界的な変化が起こる。1968年には、フランスやドイツでは学生革命が起こり、米国ではベトナム反戦運動が盛り上がる。日本でも大学闘争とベトナム反戦運動の波が高まる。中国では文化大革命が起こる。「ああ、ペルーでもそうだったんだ」と私はそのとき気がついた。世界的に同時の民衆運動の高揚があったその時代に、ペルーの首都の大学に初めて先住民農民出身の若者が学生として入った。そして卒業し、農業技術者として自分の生まれた村、あるいは農村地域に農業発展のための技術者として戻っていった。ところが、その人たちが学んだことを農村で実行してみてもうまくいかない。それはなぜだろう、どうしてうまくいかないんだろうと考えに考えた。その頃メキシコなどではイヴァン・イリイチや、ブラジルではパウロ・フレイレといった、すぐれた思想家が広く影響を及ぼしつつあった。その影響があったとされているが、実は西欧の科学技術のやり方、対象から距離をとって、主体と客体の関係をつくり対象を分析し、その対象に関する知識を情報として取り入れて、それを使って対象を変革する、

もっと生産性を上げる。このやり方がだめなのだ」と彼らは気がついた。

ブラジル出身の教育学者パウロ・フレイレは、都市のスラムの文字を持たない人たちへの教育に取り組んだ経験を元に著した『被抑圧者の教育学 (The Pedagogy Of The Oppressed)』で二つの教育の類型を示している。一方に銀行型教育という名前をつけた。私が今お話をするとき、皆さんが銀行口座の通帳を持っているとして、そこに知識を振り込む。そうすると数字の上での知識がその通帳にどんどんふえていく。そうすると教育されたことになる。それに対置されるのは問題解決型の教育である。一緒に考えて、一緒に発見して、問題に出会ったときに、知識を持っている人は知識を持って関わり、現場にいる人は現場の経験と知恵でもって関わる、その両者が対等に協同して問題を解決するような教育である。

悩み考えた末、彼らは大学をやめる。そして、技術者として知識や技術を教え込むのではなく、総体としてのアンデス世界から学ぶということに態度を変えた。アンデス世界では、すべて人、パーソンなのである。森も木も川も空気も、花も動物も、みんなパーソン(人)になっている。また、会話のうちに生きるというあり方こそがアンデスの世界のあり方だし、アンデス世界だけではなく、生命についての基本の考え方ではないかという主張を始めたのである。そして「いのち」は流れであると。

現代自然科学の中にもそういう考え方が出てきている。狂牛病問題の研究者の福岡伸一が『もう牛を食べても安心か』という著書で、牛肉の問題よりも、むしろその背後にある考え方で、アメリカのシェーン・ハイマーという人の「動的平衡」論というのを詳しく紹介している。その一節である。

「生命は、全くの比喩ではなく、「流れ」の中にある。個体は感覚としては外界と隔てられた実

体として存在するように思えるが、ミクロのレベルではたまたまそこに密度が高まっている分子の、ゆるい「淀み」でしかない。その流れ自体が生きているということである。私たちの身体は分子的な実体としては数カ月前の自分とは全く別物になっている。環境は私たちの生命を常に通り抜けているのである。その流れの中で私たちの身体は変わりつつ、辛うじて一定の状態を保っている。これは脳細胞といえども例外ではない」。この生命の流れを滞らせると、これまでにない困難な病気や障害が出てくる。この流れを逆に加速させて、富を得ようとか質を高めようということも、度を過ぎると必ず障害となってあらわれる。そういう考え方を実験的に研究し、生命は動的な平衡、流動しつつバランスしているという考え方をシェーン・ハイマーという人が提唱した。

最近ではさらに、生命というのは実体ではない、物ではない、システムであるという考え方である。そのシステムは、原因があって結果があらわれるという因果関係ではなく、外界からの影響があると、それをその場でどれが原因でどれが結果という形ではなくシステムとして応答するのだ。生命とはシステムであるという考え方も出てきている。さらに進んで、オートポイエシス、オートは自動、ポイエシスは生み出す、つくり出すという意味で、特に脳神経科学、認知科学から出てきた考えだが、科学全体の傾向としても、原因-結果関係だけで考える考え方はほとんど否定されつつあると言っても過言ではない。量子物理学が一番根本的な物質の究極の姿を研究する学問だとされているが、今では天体物理学と量子力学のさらに発展した形とが結びつき、実験的に証拠が得られないので理論仮説だが、生命の根源は非常に微細なひものようなものが激しく振動しているのではないかという説が出されてきている。存在は四つの力、二つの核力、弱い核力と強い核力、電磁力、それとも一つ重力、この四つの力から成り立っていると

いう統一理論が出てきたり、これまでの私たちが考えてきた近代科学の思考様式、パラダイムが乗り越えられつつある。そうになると、世界の先住民や水俣の底辺の人たちの保ってきた生命観も再評価されうる、そういう流れになるのではないかと思っている。

#### 注

- (1) 1986年から1987年にかけて、国連の経済社会理事会の下部組織である人権小委員会に、初めて先住民作業部会が置かれ、世界の先住民族が年に1回、1週間ほど集まり会議をするようになった。アイヌも毎年代表を出している。そこで世界先住民族の権利宣言作成の機運が高まったが、10年近く、各国政府側からの反対があり進まなかった。最近ようやく国連総会で先住民の権利宣言が承認される可能性がひらけた。
- (2) 市民によるオルタナティブな学びの場。講座、ワークショップの開催、フィールドワーク、出版情報提供などを行っている。  
<http://sapporoyu.org/>

#### 【関連図書】

- 『桜井哲夫詩集』桜井哲夫著、土曜美術社出版、2003年1月
- 『しがまっこ溶けた-詩人桜井哲夫との歳月』金正美著、日本放送出版協会、2002年7月
- 『石牟礼道子全集・不知火』藤原書店（刊行中）
- 『苦海浄土-わが水俣病』石牟礼道子著、講談社、1969年
- 『苦海浄土<第2部>神々の村』石牟礼道子著、藤原書店、2006年10月
- 『キツネのチャランケ』萱野茂著、小峰書店、1974年
- 『再生の精神』The Spirit of Regeneration: Andean Culture Confronting Western Notions of

Development (Spirit Regeneration) (Paperback)  
ed. by Frederique Apffel-Marglin with PRATEC.  
Zed Book, 1998

『対話・教育を超えて— I・イリイチ vs P・フ  
レイレ』イヴァン・イリイチ、P.フレイレ著、  
角南和宏訳、野草社、1980年

『生きる希望—イバン・イリイチの遺言』イバン・  
イリイチ著、デイヴィッド・ケイリー編、白井  
隆一郎訳、藤原書店、2006年12月

『生きる意味—「システム」「責任」「生命」への

批判』イバン・イリイチ著、デイヴィッド・ケ  
イリー編、高橋和哉訳、藤原書店、2005年9月

『脱学校の社会』イヴァン・イリイチ著、東洋・  
小沢周三訳、東京創元社、1977年

『被抑圧者の教育学』パウロ・フレイレ著、小沢  
有作訳、亜紀書房、1979年1月

『希望の教育学』パウロ・フレイレ著、里美実訳、  
太郎次郎社、2001年11月

『もう牛を食べても安心か』福岡伸一著、文芸春  
秋、2004年12月